



新しいターゲット層を獲得する このプロジェクトの狙いとは？

人口が長期間にわたって減少している、いわゆる過疎地域の面積は国土の57・3%と半割以上を占めている（平成22年4月時点）。全国各地で抱える過疎問題。人口減少に伴う地域の不活性化は、様々な問題へと発展する。交通の面でもバスの本数が減ったり、鉄道のローカル線経営が

続けられなくなるということにも。ネガティブスパイラルだ。

そのスパイラルから抜け出す一つの光となるのが、旅行者や観光客の獲得。交流人口を増やすことで、地域の魅力を外の人に伝えることができる。また、人の行き来が増えることで、交通面の活性化を期待したり、

地域の「受け入れ整備」が重要課題！

農村漁村の 日常を

ちょっとだけ

「お手伝い」



新交流人口創出モデル プロジェクト第一弾報告

「宿泊旅行実施率が減少している農山村や漁村、また過疎地と呼ばれる地域の交流人口を増やしたい」。そんな想いから企画された新交流人口創出モデルプロジェクト。2012年の秋から行われた実証実験の成果を報告する。

維持することも可能になってくる。

これまで国や県、市町村でも、過疎対策や交流人口創出の対策を行ってきた。グリーンツーリズムなどといった、ニューツーリズムもその一環だ。新交流人口創出モデルプロジェクトでは、その流れを汲みながら、「短時間のお手伝い」という形で旅行者が気軽に地域体験ができる仕組みづくりに挑戦。新たな観光客層の宿泊旅行実施率の上昇と、着地側の経済効果の向上を願い進めているものだ。

新交流人口プロジェクトの特徴

□「手伝う」という行動ソフトに着眼

着地側のコミュニティで「手伝って欲しいこと」を「手伝いたい」「役に立ちたい」という価値観に向けて旅化する。

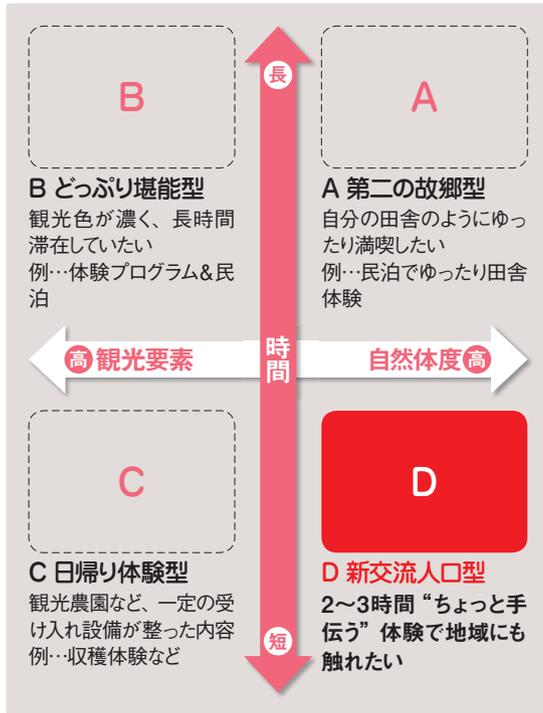
□日々の生業や営みの中で行えるプログラム

施設化された場所ではなく、生業や営みの中で参加者が素人でも行えるものをピックアップしてプログラムに盛り込む。

新交流人口3つの定義

- ①「手伝う」という趣旨をプログラムする
- ②参加時間は2〜3時間
- ③地域産品を購入できることが設定されている

図 定義メインターゲット



本プロジェクトの利点として挙げられるのが、旅行者側は「立ち寄り気分」で、気軽に地域の中へ参加できる」ということ。観光の一部として楽しむこともできるようなれば、ホテルや旅館でグルメも温泉もエステも満喫したいという層にも、アピールできるようになる。

さらに短時間なので、農家など受け入れ側も旅行者の対応に費やされる時間が少なくなり、負担も軽くなる。宿泊や料理の用意などにも必要なく、収穫できるものがなくても可能だ。観光農園のように設備が整っている必要もなく、ありのままの日常に「手伝ってもらいたい」作業があり、それが旅行者の地域体験になるものであればいい。つまり、受け入れ先

の新たな開拓もできるのだ。

プロジェクトを実行する上で、じやらんりサーチセンター(JRC)では「①2次交通」や「②事務局機能」、「③プログラム」の3つの課題を想定した。①や②は過疎地域や山間の農村、小さな漁村などの観光復興を計画する際に生じる課題だ。それに加え、今回の取り組みに対する受け入れ側の理解が③には関わってくる。プロジェクトに関わる地域の人々全員が、旅行者が「手伝う」という趣旨の共通認識を持つことが、まずプログラムをつくる上で大切になるのだ。JRCでは、この3つの課題と思われる仮説に基づき、新しいターゲット層の獲得を実現するため、今、実証実験を行っている。

図 3つの課題と思われる仮説の件所

	①2次交通	②事務局機能	③プログラム
理想形	<ul style="list-style-type: none"> <input type="checkbox"/>現地までの移動手段 <input type="checkbox"/>できれば宿から現地の移動手段 	<ul style="list-style-type: none"> <input type="checkbox"/>申し込み、問い合わせ先 <input type="checkbox"/>現地(地域関係者)へ一括して連絡 	<ul style="list-style-type: none"> <input type="checkbox"/>受け入れ先がわざわざ準備することなく自分たちの日常のスケジュールに2〜3時間だけ合流するイメージ <input type="checkbox"/>ちょっと手伝うことで得る満足、ちょっと地域に入ってみる、というちょっとした体験
必要な理由	<ul style="list-style-type: none"> <input type="checkbox"/>過疎の道路事情(初回訪問者にとって、ナビ的にも道のにも運転が困難) <input type="checkbox"/>主要駅または宿泊施設から送迎バスなどで直行できることが需要喚起につながる 	<ul style="list-style-type: none"> <input type="checkbox"/>現地コーディネート業務 <input type="checkbox"/>問合せや応募受付(個人、代理店、宿泊施設など) <input type="checkbox"/>必要なサポート 	<ul style="list-style-type: none"> <input type="checkbox"/>今回のターゲットニーズに合わせた、地域全体のプログラムの構築 <input type="checkbox"/>体験に伴う準備物を割り出す <input type="checkbox"/>作りこみ過ぎ、長時間になり過ぎないように注意
解決策の想定案	<ul style="list-style-type: none"> <input type="checkbox"/>対象をマイカー、レンタカーと割り切る <input type="checkbox"/>送迎許可を持つ宿泊施設と連携 <input type="checkbox"/>コミュニティバスなどの連携 <input type="checkbox"/>公共交通機関を起用 	<ul style="list-style-type: none"> <input type="checkbox"/>地域で役割を持つ(公民館など) <input type="checkbox"/>役場など公的機関や商工会などが担う <input type="checkbox"/>観光協会や地元エージェンツ、宿泊施設など民間などが担う <input type="checkbox"/>NPOなど中間支援組織が担う 	<ul style="list-style-type: none"> <input type="checkbox"/>地域のかかわる方々との共通理解 <input type="checkbox"/>地域とコミュニケーションが密な方の協力を得る

実証実験

1

2012年
10月28日

島根県奥出雲町

山間地域の農家で行われた 実証実験のプロローグ

全国の8地域で行ってきた新交流人口プロジェクトの実証実験。

その中で、奥出雲町の農家で行われたものを、まずは紹介しよう。

これをきっかけに、奥出雲町とJRCの共同研究に発展した！



**農家の想いが深く伝えられ、
野菜の宣伝にもなった！**

「手伝ってもらおうという作業を通して、農家の想いやこだわりを伝えることができたのが良かった」と感想を述べる田部農園の田部さん。農業体験を目的にした受け入れの経験はあるが、出荷までをプログラムに入れたのははじめてだったという。出荷の商品を取り扱うことで、モニターにも緊張感が生まれた。

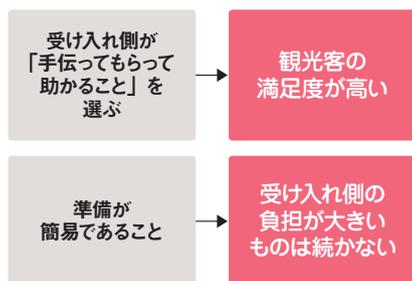


減農薬栽培で野菜を育てている田部農園で、大根収穫から出荷までを「手伝う」体験を実施

Point①

プログラム作成

プログラム作成のコツと注意点



11:00 昼ごはんの準備

12:00 昼ごはん

13:00 ピーマンのつるの巻き付け●

14:00 シイタケのほだ木倒し●

15:00 休憩●

16:00 乾燥シイタケの袋詰め

●…この日常の営みに、観光客が2~3時間合流

農家などの受け入れ側の日常は、旅行者の非日常。簡単な作業でも「手伝う」ということで地域体験ができる。休憩時にも特別な料理を出すなどの過度なおもてなしを避け、負担を軽減。持続できるプログラム作成をする

実証実験は本プロジェクトのチームメンバーをモニターとして実施。受け入れ先（田部農園）、行政（奥出雲町）、旅行業の登録を持つ宿泊施設（株式会社奥出雲振興）と、3つの課題の検証が行われた。JRCの下で行われた実証実験では、結果的に良い感想が聞けたが、細かい問題点も。「事前に行政から説明を受けていたが、どのように手伝ってもらったらいいいのか、農家側からみた満足度や効率面など具体的な

イメージができなかった」（田部農園）、「会社で保有するバスは白ナンバーのため、2次交通としての利用は難しい。別途バス会社と連携して送迎+宿泊+体験プログラムを企画することも可能だが、価格は高くなる」（株式会社奥出雲振興）、「農家で旅行者を受け入れることの意義を理解している人がまだ少ないため、啓発が必要。模範となる受け入れ先をつくり出したい」（奥出雲町）などの意見が出た。

県地域振興部に聞く！

**観光だけでは終わらない
今後の可能性の広がりに期待**

島根県では農山漁村の人や暮らしにふれる「しまね田舎ツーリズム」推進事業を9年ほど前から実施している。しまね暮らし推進課の課長を今年3月まで務めていたという坪内さんは、「このツーリズムは、観光の良さを体験していただくために行われています。リピーター率も高く、そうしたファンが増えることで、地元の人も自分たちが住んでいる地域の価値を認識できる。地域活性にもつながります」と語る。

そして「最初にこのプロジェクトの話を聞いたとき、これはいい！と思いました。ターゲット層の隙間を埋めることができる」と話を続ける。「中国横断自動車道尾道松江線が来年全線開通となるので、奥出雲町もインフラが整ってきています。キャベツなどの指定産地だったり、歴史や文化もあり、地域資源も豊富。町の活性化に励む女性たちもいる。このプロジェクトで、奥出雲ファンが増えることを期待しています」。



島根県病院局 県立病院課
課長 坪内清さん

元島根県地域振興部しまね暮らし推進課課長

奥出雲町とJRCの共同研究に発展！

商工会が事務局として機能。

4つのプログラムでツアー開催

新交流人口創出モデルプロジェクトの一環が、奥出雲町とJRCの共同研究に発展。

JRCは今、新交流人口創出モデルの事務局機能構築支援とコンサルティング、テストマーケティング(モニターツアー3回予定)を奥出雲町で行っている。

地元を愛する人の力で事務局機能がパワーアップ

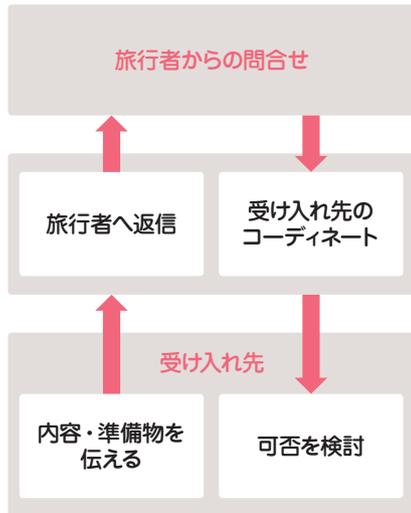
新交流人口創出モデルプロジェクトを成功させる要となるのが事務局機能。今後を考えて行政に加え、奥出雲町神話とたたら里推進室(観光案内)、そして奥出雲町商工会が事務局機能として動くことになった。

なかでも中心的に動いたのが、地域振興巡回員の松崎さんだ。「以前より、奥出雲町にはたくさんさんの魅力が

Point②

機能する事務局を作る

受け入れ先のコーディネートは、受け入れ先の詳細把握が重要なポイントになる。そこで事務局機能は、地域の人たちと密接なつながりのある公的機関(役場など)や商工会、観光協会などが担うのが理想的だ。旅行者からの問合せや応募に素早く答えられ、受け入れ側のサポートも細やかにできるようにしたい



あるのに、町の人がそれに気がついていないように思っていました」と話す松崎さん。3年ほど前に、埼玉県から奥出雲町へ移住してきたそうです。そんな彼女がプロジェクトの話を田部農園から聞き、自ら手がけたいと名乗りを挙げた。松崎さんは各所に受け入れ先の話をもちかけたり、必要な用具などをそろえたりと事前準備に奔走。行政や観光案内と連携をとりながら精力的に動き、事務局機能は構築されていった。



7月9日・10日のモニターツアー当日は奥出雲町出身者・在住者とJRCスタッフがモニターとして各プログラムに6~7名ずつが出席した

JRCは、事務局を支援しながら、7月9日・10日にモニターツアーを開催。第1回目は実証実験を行った田部農園に加え、森田醤油店、雲州そろばん協業組合、奥出雲ツーリズムの4つのプログラムで安全面・受け入れ手順や流れをテーマに検証。モニターには体験前の期待値や体験後の満足度をはじめ8項目、受け入れ先にはプログラムの希望販売価格や今後の参加意欲などの12項目のアンケート調査を5点評価で行った。

事務局担当者に聞く！

新交流人口プロジェクトは町の魅力の再確認にもなる

埼玉県から奥出雲町へ移住した当時に感じた町の印象を、松崎さんはこう語る。

「歴史が古く、たたら製鉄により栄えたという独特の文化が残っています。自然に囲まれ、埼玉県から来た私には別世界でした。だが、町に住む人たちにとっては慣れ親しんだ日常の風景。「若い人たちが休日に出る松江市街などで遊んだり、奥出雲町の名物や特産物を味わうよりもファミリーレストランのメニューを好むファミリーが多いと感じます」。そんな町の人たちに、旅行者が「手伝う」観光プログラムという趣旨を伝えると、「そんなことが観光になるのか？」との疑問も。また「奥出雲町には客に料理をふるまうというおもてなしの文化が根付いているので、負担がかかると思われがち」と松崎さん。それでも、このプロジェクトの趣旨を理解してもらえるようがんばっているのは、「町の魅力の再確認になると思う」から。自分たちが住んでいる地域の価値に、気づいてもらいたいのだ。



奥出雲町商工会
松崎百合子さん
地域振興巡回員

実例

Case 1

田部農園のプログラム

山間のこだわり農家で 減農薬栽培の畑仕事を体験

言葉や文章では伝わらない
農家の想いを体験で伝える

実証実験に引き続きの参加だけあり、事務局との連絡はスムーズで、事前準備の大変さも感じないなど、振り返りでも良い点数ばかりをつけていた田部農園。これまでの交流事業や観光受け入れと比べてやりやすかったか? という問いにも5点をつけ、今後の参加意欲も満点だ。

「土や野菜、安全面の知識など、農家はあたり前に知っていることでも、



プログラムの内容

減農薬栽培の人参の収穫および出荷作業。事前説明15分、人参の収穫作業40分、作業場での休憩30分、出荷作業30分、計2時間ほどのプログラム。夏の晴天時に行われた作業のため、熱中症や日射病対策が必要となった。また出荷作業は葉を切り落とすために刃物を使用したことが、安全面への不安につながった。



休憩時には奥さん手づくりの「人参のソースがかかったプリン」も出された。モニターは人参の味見もできて満足

モニターからの評価 (5段階評価)

体験前の期待値 **3.0点**

体験後の満足度 **4.6点**

1.6ポイントUP

モニター7名の平均値でプログラムの適正価格は2,571円。安全面での不安は3.0点と低め。要因は暑さや害虫への不安、包丁を使っての作業の配慮など。野菜を購入した3名の平均購入額は3,667円

モニターの声

- 体験前「暑さや虫、畑仕事が初体験で不安」、「田部さんの人柄が分からず不安」(怖い人だったらどうしよう)、「ワクワクした気持ち。生産者の想いや工夫を知りたい」
- 体験後「田部さんの野菜へのこだわりを聞き「買いたい」という気持ちになった」、「夏の日中の作業は危険だと思った」、「出荷作業は緊張感があり、やりがいもあった」

参加者は知らないということがいっぱいあります。また、モニターの方

の話しを聞いて、参加者が何に興味を持つのか、どんなことが面白いのかなど気付かされるのが色々ありました。受け入れ側も、もっと勉強

「そんな上昇志向的な考えからか、モニターに「楽しんでもらえたとと思うか?」との問いには3点、全体的にうまく行ったと思うか?」には3点と控えめの点数をつけている。

「前回の実証実験の際には説明が

長くなってしまったのが反省点です。

でも、今回は休憩時間に人参のソースがかかったプリンなどをモニターの方に味わっていただきながら、減農薬の話をしました」。

作業中に畑で説明をすれば手が止まってしまふ。だから休憩時間を上手く利用して農家の想いを伝え、食べてもらうことも大切に行っている。

「いつも、家内がそのときに収穫している野菜を使ってお茶菓子をつくっていますので」と田部さん。次回は何のお茶菓子が出るか楽しみだ。

受け入れ側に聞く!

プログラムの意義を考えて
続けられるものにした

手間がかかるといわれている減農薬栽培。言葉で聞いても、それがどれほど大変なのか理解できていない人は多いだろう。

田部さん曰く、「農業の場合、人海戦術的にできれば助かることがあります。そんな作業をピックアップして、プログラムにできればいいと思います。手伝うとしても相手は素人。100%の労働力としては期待できない。逆に負担になることもあるだろう。「でも体験していただくことで、農家の想いやこだわってつくった野菜の味を伝えることができるのはメリットです」。

そういう田部さんも、最初は家族に反対されたそうだ。「お客さまを迎えるという感覚で、100%満足していただかなくてはという思いがありました。でも、田部さんは「いろんなものを食べてもらったり、楽しいことを提供するの目的ではない。まずはやってみよう」と家族を説得。続けることを視野にいれて、いろいろアイデアを出しながらプログラム作成に挑戦中だ。



田部農園
代表 田部義美さん
減農薬栽培農家

実例

Case 2

森田醤油店のプログラム

昔ながらの製法を守る

手づくり醤油の攪拌をお手伝い

職人では気づかなかつた 安全面などの不安解消が課題

1903年創業の老舗で、今でも
麹づくりから手がけ、昔ながらの醬
油を製造し続けている森田醤油店。
原料にもこだわり、「大豆と小麦は全
て国内産。大豆の約9割と小麦約6
割が島根県内産」という。

関東や東海方面への出荷量も多く、
「その方面から来た方から、麹づくり
などの醤油づくりの工程見学をお願
いされることもあります」と森田さ



プログラムの内容

醤油の攪拌作業。事前説明20分、醤油の攪拌
作業70分、休憩・商品説明30分、計2時間ほ
どのプログラム。攪拌作業の途中に冷えた甘酒を
出す配慮も。当日は汚れてもいい服装で来るよう
にとモニターには事前をお願い。長靴は事務局で
用意したが打ち合わせ不足により他で使用したも
のになり、衛生面でモニターの指摘を受けた。



休憩時にモニターをお店
にも案内すると、ぼん酢
やそばつゆ、生醤油、
三年熟成醤油などを購
入する人も

モニターからの評価 (5段階評価)

体験前
の期待値 **3.9点**

体験後
の満足度 **4.9点**

1.0ポイントUP

モニター7名の平均値で
プログラムの適正価格は
1,386円に。トータル時間
は2.9点とちょうど良く感じ
られていた(1点=長く感じ
た~、5点=短く感じた)。
安全面は足場の不安から
2.9点と少し低めになった

モニターの声

■体験前「醸造所に入るのが楽しみ」、「良い醤油がどの
ように製造されているのか知りたい」、「工場見学が好き」、
「攪拌作業のイメージがつかないので不安」

■体験後「醤油づくりの大変さを実感した」、「白衣代を
体験料に含めては?」、「作業の目的が明確で、ハッピー着
用の記念撮影や緑麹の甘酒もよかった」

ん。見学者の受け入れは経験がある
ので、今回のモニター受け入れも難
なくできたようで、アンケートでも
点数を低くつけた項目はなし。だが、
体験ははじめてだったので「攪拌す
る時間を長く感じる方がいたり、安
全面で不安を抱いた人もいたので、
次はその点を改善したいと思います」。
醤油の攪拌とは、樽に入った発酵・
熟成中の醤油を、かい棒でかき混ぜ
る作業のこと。樽の上に置かれた細
い板の上に乗って行う、少し力のい
る作業だ。慣れた職人なら楽に素早

く混ぜられても、素人では混ぜるの
に想像以上の力と時間がかかったよ
うだ。「2人ずつで交代しながら行っ
ていただいたのですが、それでも大
変だったようですね」。1樽を攪拌す
るのに職人1人で30分ぐらいでき
るといいますが、素人の場合は数人が交
代でやつても1時間ほどかかる。
「それでも攪拌は醤油蔵の中にも
入れるし、樽の上に立てるので喜ば
れると思います。見学の場合は樽の
中を覗くまでですから」。手伝うから
こそ、特別なものが体験できるのだ。

受け入れ側に聞く!

本物の醤油づくりを伝え、 味の違いを実感していただく

今回、モニターツアーの受け入れ先を引
き受けた理由を、森田さんはこう語る。

「醤油づくりの工程の背景を知っていた
いたり、ふれていただくことで、自社商品
のファンが少しでも増えればと思ったん
です」。現在1500〜1600ほどあるとい
われている日本の醤油メーカーの中で、原
料選びから製麹やもろみ管理、火入れまで
を一貫して自社で行っているところは10%
ほどだという。「だからこそ、本当に原料処
理をしているのを見ていただきたい。そ
して、こういう工程でつくと、どんな味
になるのか体験していただきたいのです」。
全体の流れの説明を受けた後で、自分が何
を体験しているのかを理解すれば、手づく
りの大変さも実感できるはず。そのこだわ
りが味の違いとなることもだ。

「体験後、店頭の商品にも興味を持って
いただき、購入いただければ嬉しいです」。ち
よっとしたお手伝いの受け入れが、ファン
やリピーターを増やすきっかけになるのだ。



有限会社 森田醤油店
代表取締役 森田郁史さん

原料選びから一貫して
行う老舗の醤油店

プログラムの内容

そろばんの制作補助作業。事前説明10分、そろばんの制作補助作業1時間25分、休憩40分、計2時間15分ほどのプログラム。普段から話をするのが苦手という職人も多く、集中して作業をしなければならぬ作業者への配慮も必要と感じられた場面も。「作業は楽しかったが、職人さんに負担がかかっているのが分かるので立ち位置が難しかった」というモニターの感想もあった。



モニターからの評価 (5段階評価)

体験前の期待値 **2.8点**

体験後の満足度 **4.2点**

1.4ポイントUP

モニター6名の平均値でプログラムの適正価格は1,140円。受け入れ側の案内や説明の分かりやすさが2.7点と評価低めに。「雲州そろばんのうんちくが聞きたい」との意見も

モニターの声

【体験前】「雲州そろばんについて学べる期待」、「製造プロセスを知りたい」、「何を手伝うか想像できない」
【体験後】「そろばんの玉差しができて満足」、「役に立ったのか疑問」、「達成感を持たせる工夫がほしい」

事例

Case 3

雲州そろばん協業組合のプログラム 伝統工芸の技を伝える 雲州そろばんづくりに参加

雲州そろばんの紹介や
作業工程の伝え方が課題に

「小学生の社会科見学とはだいぶ違いました」と話す梅木さん。目的が明確に分かる子供たちとは違い、旅行者が何を求めているのかイメージ



Staff
梅木紀美子さん

雲州そろばん
協業組合
(そろばんと工芸の館)

職人の高齢化が進み、後継者育成が課題になっているという雲州そろばん協業組合。「この産業を守るために情報発信をしていきたいと思っていたのですが、モニターツアーでは今まで疎かにしていたその部分を指摘された気がしました」。最近パンフレットやチラシなどもつくってなってきたという。「課題を克服して、情報発信をがんばりたいと思います」。

受け入れ側に聞く！
伝統産業を守るための
情報発信の場にした

できなかったという。「奥出雲町は雲州そろばん発祥の地。その歴史と職人さんの技を伝えたいと思っています」。だが、モニターからは事前説明がわかりにくかったとの意見が。雲州そろばんの説明や作業内容などの伝え方を見直すのが課題になった。

プログラムの内容

水田の草取り作業。事前説明20分、水田の草取り作業1時間40分、後片付け20分、計2時間20分ほどのプログラム。全国的にも評価の高い多摩の産地だけあり、水田作業に興味を持つ人も。だが、腰ぐらゐまで稲が育っている水田での作業だったので、安全面での配慮が必要という結果に。半そでシャツで作業をした人で「稲の葉にふれ、腕が痒くなった」人も。



モニターからの評価 (5段階評価)

体験前の期待値 **2.9点**

体験後の満足度 **3.1点**

0.2ポイントUP

モニター6名の平均値でプログラムの適正価格は643円。トータル時間について長く感じた人が多く「ボランティア感あり」という意見も。休憩が少なかったのも原因

モニターの声

【体験前】「水田作業は大変だと覚悟していた」、「米に興味がある」、「ブランド米の作業を体験したい」
【体験後】「2時間ではやりきれない作業量で満足度は下がった」、「お米を食べる時間があると良かった」

事例

Case 4

奥出雲ツーリズムのプログラム 田んぼの作業を手伝い、 田舎暮らしにふれる

農業のお手伝いは時期により
受け入れに不向きな作業も

農業は時期により作業内容も異なり、必ず旅行者が参加できる作業があるわけではない。そんな問題に直面したのが奥出雲ツーリズムだ。



代表
柴田昌夫さん
奥出雲ツーリズム

「農家にとって手伝ってほしいことと、旅行者が手伝いたいこと、この2つに折り合いをつけるのが難しい」と柴田さん。農家なら時間をかけず簡単にできる作業でも、素人だと長時間の大変な作業になってしまう。だが、柴田さんとの会話に好意を持ったモニターも多い。「今後は休憩など、話をする場を設けたいと思います」。ふれあいの場づくりも大切だ。

受け入れ側に聞く！
農家と旅行者それぞれに
折り合いをつけるのが難しい

柴田さん曰く、「そのときにお願ひしたかったのが田んぼの雑草取りだったんです」。7月にもなると稲は成長していて、中腰で作業すれば稲の先端が顔に触れることも。水田での作業は興味を持つ人も多いが、軽くても傷がつく作業は不向きなようだった。

実証実験

その他の地域

様々なプログラムで検証 各地で開催された その他の事例を紹介！

都会に住む人間にとっては非日常になる
農村漁村や山間の集落の営み。全国各地で行われた
農業、漁業、林業などのプログラムの検証を報告。

手伝う+2時間+産品購入で 経済効果も見込める

着地側のコミュニティで、手伝ってほしいことを、手伝いたいという価値観に向けて旅化する新交流人口プロジェクトの実証実験は、奥出雲町の他にも7つの農村漁村などで行われている。実証実験では、モニター（本プロジェクトメンバー）に体験前の期待値や体験後の満足度はじめ4項目、受け入れ先にはプログラムの希望販売価格や今後の参加



農村漁村などのそのままの日常も、観光客が楽しめるものになる。また、加工されたものばかりが買いたいものではないのだ

意欲などの12項目、そして事務局や行政にもそれぞれに自己評価など含めた5点評価のアンケートを行った。

実証実験の結果で見えてきた傾向は、モニターの期待値と満足度では「作業の内容ではなく、自然体の作業を手伝う」という内容が高評価ということ。収穫体験のように準備された内容に対しては期待値と満足度に変化はなく、本格的なお手伝いや出荷作業などが満足度で高評価に。また、受け入れ側から「ありがとう」と感謝の言葉があると、達成感などにつながり評価が高くなるようだ。

作業時間は2時間が、ちょうど良い。またプログラムに感じる適正価格は2071円。産品などの購買価格は平均2000円だが、臨時直売所を設けるとモニター全員が購入したという例も。体験後は購買意欲が高まり、直売所などへ導く工夫をすれば、購買向上も見込める。

**新交流人口プロジェクト
実証実験
カタログ**

その他7カ所で行われた農業や漁業、林業のお手伝いプログラム。実施日や実証実験の内容、作業時間などと、受け入れ側や事務局、行政から出た主な意見を一覽で紹介しよう。

⑥ 長崎県西海市 西彼町漁協 牡蠣の出荷



2013年4月10日に実施。牡蠣小屋での出荷作業2時間のプログラムを検証。事務局機能は西彼町漁業協同組合が担当。「牡蠣小屋での作業は安全でリスク管理がしやすい」、「お金をもらうことに抵抗感がある」。

④ 長崎県西海市 大瀬戸町漁協 魚の荷受け・出荷



2013年4月9日に実施。活魚の荷受けから出荷作業まで2時間のプログラムを検証。事務局機能は大瀬戸町漁業協同組合が担当。「事務局を漁協が担うことは難しい」、「意外に魚に触れる体験は喜ばれるとわかった」。

② 高知県本山町 大石地区 田植え



2012年5月27日に実施。田植え作業のお手伝い1時間30分のプログラムを検証。事務局機能は本山町まちづくり推進課が担当した。「民泊は難しいが、これなら可能」、「季節にあわせてたコースを組み立てることもできる」。

⑦ 秋田県大館市 山田地区 草刈り・草取り



2013年6月14日に実施。林道の草刈り・草取り作業1時間30分のプログラムを検証。事務局機能は秋田県大館市山田部落会が担当。「草刈り・草取りのお手伝いは助かる。都会の人にはストレス解消にもなる」。

⑤ 長崎県西海市 瀬川漁協 地引網漁



2013年4月10日に実施。地引網漁のお手伝い1時間30分のプログラムを検証。事務局機能は瀬川漁業協同組合が担当。「はじめての人に本業の魚を手伝ってもらうには、受け入れ側が対応・準備するための工夫が必要」。

③ 新潟県長岡市 一之貝地区 田んぼ周りの草きり



2012年7月17日に実施。田んぼ周りの草きり作業1時間30分のプログラムを検証。事務局機能は長岡市役所と復興支援員が担当。「復興支援員のように地域の状況を把握し、まとめられるリーダー的な人材が必要」。

① 高知県安芸市 入河内地区 お茶刈



2012年5月26日に実施。お茶刈体験と製茶工場の見学で計2時間のプログラムを検証。安芸市役所を窓口、地元公民館を通して受け入れ側を調整。「作業を通じた交流と考えている」、「ゲストという扱いになってしまう」。

奥出雲町新交流人口創出モデルプロジェクト

さらなる課題を克服して

第2回モニターツアーを開催！

第1回目のモニターツアーで出た課題の克服に各受け入れ側が挑戦。

第2回モニターツアー開催前の9月に、JRCではプログラムの

コンサルティングも行った。課題克服はできたか、新情報を報告しよう。

安全面の配慮が向上し、プログラムの品質がアップ

前回とは違い、町外から訪れた人たちがモニターとして参加した第2回モニターツアー。第1回でのテーマになっていた安全面や受け入れ手順・流れでの課題克服は、どの受け入れ先でも課題克服ができたようだ。特に安全面の配慮で変化を見せたの



(上) パイプの枠組みに足場になる板を置くことで、不安定さを解消(森田醤油店)。作業中はロープをつけて不安感をやわらげた(下左)田部農園では作業前に毛虫などの害虫への注意を伝える場面も。危険要素を事前に伝えることもトラブル予防だ(下右)プロジェクターにより作業イメージを出しながら説明する雲州そろばん協業組合の梅木さん



が森田醤油店。JRCのコンサルテイングで提案した安全性の向上に、大樽の周りにパイプの枠組みをつくり、高所作業用のロープもつけることと対応。また、衛生面の配慮から事務局では不織布のつなぎと、専用の長靴を用意した。これに対して、モニターの評価も向上し、課題をクリアしている。

雲州そろばん協業組合の課題は、

事前説明での伝統や作業内容・工程の伝え方に工夫を加えること。コンサルテイング時に伝統に関してもつとふれたほうが良いとアドバイスをした。当日は紙の資料を配布するのに加え、プロジェクターを使用して作業内容・工程をモニターがイメージしやすく説明。事前説明に要する時間も増やし、伝統に関する話も盛り込まれた。モニターからも事前説明がわかりにくいという声がなくなり、こちらも課題克服となったようだ。田部農園は今回で3回目とあり、プログラムについてはもう完成間近。刃物を使用する際には離れて作業してもらうなど、前回で指摘された安全面での不安を感じさせないための細やかな配慮も。奥さんがつくった大根の料理も評判良し。野菜の品質の良さもモニターに伝わっていた。それぞれが課題を克服し、さらに魅力的なプログラムができたようだ。

町の行政に聞く！

人と人をつなげながら、町全体で地域づくりに挑む

「小さな町の行政は、横のつながりを持って、いろんな人と手を結ばないと成り立たないことがよくあります」と森長さん。最初の実証実験のときも、受け入れ先を決めるのに農業振興課と相談してリストアップし、田部さんをお願いすることにしたそうだ。今回、このプロジェクトに対する行政の役割を聞いてみると、「事務局機能は商工会が中心で、行政はサポート役です。行政が入ることで信用度が増し、商工会も町の人に参加を呼びかけやすくなる。お互いの持っている情報や人脈を利用して、人や民間の団体などを紹介し合うこともできます。人と人をつなげる接着力のような役割です」。また、本プロジェクトの今後について、「プロジェクトに参加することで、今までつながりがなかった人たちに交流ができました。そのつながりを生かせればと思います」。例えば、田部農園の野菜と森田醤油店の醤油を組み合わせた販売など。新たな挑戦が、新しい商売のアイデアを生み出している。



課長
森長洋二さん

奥出雲町役場
地域振興課

考察

日本の隅々まで楽しみ、楽しみたい

本プロジェクトで最も注力していることは、「長続きする仕組みづくり」。受け入れ先にも参加目的を明確にさせていただき、自分たちの願いも叶えていただくことを重要視している。奥出雲町の共同研究では、自己実現も叶うよう個別面談での支援も行い、モニターツアーのたびにプログラムや体制が向上するよう検証している。

また、全体が円滑に進められるよう、事務局機能の整備や体制、ソフト面の両面から機能強化に努めている。モニターツアーを行いながら確立させていく取り組みはプログラム構築に気を取られがちになるが、受け入れ先も含めた確実な事務局機能があってこそプログラムが生きるのだ。目指しているのは、当日申し込みも受け付けられる強い機能。そして、近隣観光関係者と連携して誘客導線が作れるという行動力を持ち合わせる機能だ。

同時に地域の経済効果に寄与するものでありたく、受け入れ先の取扱商品が購入されることも目的にしている。実証実験では体験者が手伝った商品に愛着が湧いて購入したくなるのに対し、その商品が入手できる場所や機会が準備されていないということが多々あった。奥出雲町ではその点も含めて、今、体制を整えている。

本プロジェクトの定義は「手伝う、2時間、産品購入」。「一歩踏み込んで地域の生業や営みにふれたい。でも訪問先の魅力や観光も満喫したい」という方をターゲットに、「2時間程度のちょっとした手伝い」という内容で構築している。観光客には日本の隅々まで、受け入れ先には訪問者とのふれあいを楽しんでいただくことを目指し、どの地域でも取り入れられるシンプルな事例の確立に努めている。



じゃらんリサーチセンター
客員研究員

玉沖 仁美

専門分野は着地型商品
開発、産品開発・国内
外での販売。自立支援
を主軸とした人材育成



新垣慶太さん

国土交通省 観光庁 観光地域
振興部 観光資源課長

Interview

観光庁に聞く、今後の国内旅行 着飾らないそのままの地域の姿が 今後の観光資源になっていく

住んで良し、訪れて良しの
地域づくりで交流人口を増やす

「住んで良し、訪れて良しの国づくり」に取り組み、観光立国の実現を目指している観光庁。その取り組みを、新垣さんは地域に置き換えて話す。「自分たちが住んでいる町の良さを、知って誇りに思い、着飾らないそのままの暮らしや文化を外から来る方に味わっていただく。そして交流人口を増やしていく。そんな地域づくりを各地でおこなっていききたいと、観光庁では思っています」。

「わが町には何もない」と無為に卑下するのではなく、本心で魅力に感じていることを磨き上げて発信してほしいという新垣さん。「そういう意味で、私は何が観光資源になっても良いと思います」。新交流人口プロジェクトのプログラムのように、お手伝いが観光になるのもいいという。「受け入れ側にも過度の負担がかけられない。旅行者も気軽に足を延ばせる。この敷居の低さは、発展する可能性があると思います。でも、これを事業として続けるためには、事務局に覚悟が必要だと思います。天候が崩れたときや、プログラム提供者の体調が崩れた場合に、事務局は

どうアレンジできるか。旅行者の期待を裏切らないように責任感を持たないと、逆効果になる恐れもある。奥出雲町の事務局機能は円滑にまわりはじめていますので、良い事例になることを期待しています」。

また、「ワンストップサービスの機能が備われば、さらに理想的」とも。ワンストップサービスとは旅行者からの問い合わせをたらい回しにせず、観光に関することはまず一元的に対応すること。この機能が高まれば、町の体験プログラムは活性化するという。今後、事務局機能の向上が課題になる地域が増えるだろう。

